

2022年1月1日主イエス命名の日

旧約聖書 出エジプト記 34 章 1-9 節
使徒書 ローマの信徒への手紙 1 章 1-7 節
福音書 ルカによる福音書 2 章 15-21 節

東京聖三一教会の皆さま、新年明けましておめでとうございます。皆さまと初めて迎える新年です。一般の暦では、元旦ですが、教会歴では、主イエス命名の日となっています。1月1日は、「八日たって割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた。これは、胎内に宿る前に天使から示された名である」（ルカ 2:21）と、本日の福音書の記述にある通り、イエス様の誕生を祝う12月25日・クリスマスの当日から数えて、八日目にあたるからです。

わたしたち聖公会は、カトリック教会と同じく、教会歴に祝日という概念がありますので、1月1日を主イエス命名日として礼拝します。しかし、プロテスタント教会では、祝日という概念がありません。それゆえ、日曜日（主日）以外に主日と同じ内容・規模の礼拝をすることも稀ですから、1月1日が日曜日ではない限り、礼拝はないという教会も少なからずあります。また礼拝をおこなうとしても、「新年礼拝」あるいは「元旦礼拝」とするのが通例だと思います。ただし、12月31日から1月1日という時の区切りは、教会の歴史と無関係ではありませんので、「新年礼拝」・「元旦礼拝」という表現も、特に問題はないと思います。しかし、一年の始まりにイエス様が、イエスと名付けられたことを改めて自覚して、その年を歩み始めることは、非常に重要な意味があります。本日は、このイエス様の「イエス」というお名前の意味を中心に、学びたいと思います。

「イエス」という名前は、わたしたちにとっては特別な名前です。ただし、称号のような名前ではありません。イエス様の時代のローマ皇帝のオクタビウスが、「威厳ある者」としてアウグストゥスと呼ばれたような称号とは異なっています。旧約聖書に「ヨシュア記」という文書がありますが、そのヨシュアという名前に他なりません。ユダヤ人の間では一般的な名前です。ヘブライ語の正確な発音は難しいのですが、ヨシュアは、正確にはイエホシュアです。少し長いです。そこから、その短縮形イエシュが用いられるようになり、それがギリシア語でイエス（主格）と発音され、聖書協会の『聖書』の訳語は、イエスとなりました。わたしたち聖公会は、プロテスタントと一緒に、イエスという訳語が一般的ですが、日本語訳にはそれ以外にも、「イエズス」、「イイスス」があります。

最初の教会の人々にとって、イエスという名前は、一般的な名前であると認識すると同時に、『聖書』に関連させて言えば、「ヨシュア記」やその中のヨシュアを想像したと思います。『聖書』新約でも、イエス様ではないイエス、「バラバイエス」（マタイ 26:17 など）や、「ユストと呼ばれるイエス」（コロサイ 4:11）が登場します。

このヨシュア、イエスという名前は、名前として一般的と言えるのですが、言葉としては、「主は救い」という意味があります。基本的に、ヘブライ語の人の名前は、わたしたちのような漢字文化の名前ほど、豊富な文字と意味の組み合わせはありませんが、単に音声を現わすだけではなく、意味を持っています。ヨシュアの意味は、ヨシュア記の物語から考えても、「主なる神が救いである」という非常に大切な意味を持つ名前なのです。

このことから考えますと、イエス様がイエスと名付けられたという出来事
背景にあるのは、「主は救いである」、そのことを改めて確認するためと言
えると思います。「主は救いである」、それは少なくともユダヤ人にとっては
当たり前といえますが、なぜあえて新しい救い主に、そのような名前がつけ
られたのか、それは単純に人間がそのことをすぐに忘れてしまうからです。
また、主なる神から離れて、他の存在に頼りたくなってしまう場合がある
からです。

それでは、主なる神様の存在を忘れるとはどういうことでしょうか。それ
には、『聖書』に書かれている主なる神様以外の存在を信じる、あるいは肯
定することという意味もあるかと思ひます。しかし、そこまで積極的に忘
れるというよりも、人間が人間中心に考え行動してしまうということの
ほうが、多いのではないかと思ひます。

本日の詩篇 8 編 4 節に「**人とは何者か、なぜ、これにみ心を留められるのか //
なぜ、人の子を顧みられるのか**」という文言があります。この部分は、新
共同訳では、8 編 5 節ですが、「**そのあなたが御心に留めてくださるとは、
人間は何ものなんでしょう。人の子は何ものなんでしょう。あなたが顧
みてくださるとは。**」となっています。また聖書協会共同訳では、「**人
とは何者なのか、あなたが心に留めるとは。人の子とは何者なのか、
あなたが顧みるとは。**」となっています。それぞれ訳文が微妙に違
いますが、人間とは、主なる神様が心に留めて下さらなければ、何
ものも出ないことを示しています。つまり、人間という存在は、地上
のいきものの中なかで、特別な存在かもしれないが、決して思いあ
がってはいけません。主なる神様を忘れないとは、そのことを忘
れないという意味にはほかなりません。そして、主なる神様を信
じるとは、そのことを抜きにしてはありえないのです。

次に、主なる神様から離れて、他の存在を信頼するについて考えてみ
ます。それは現象としていろいろな形で存在すると思ひます。また、主
なる神様を信じるという信仰があっても、起こる現象であると思ひ
ます。『聖書』の様々な物語から考えても、強い軍事力、経済的繁
栄、卓越した外交政策、整った様々な制度、あるいは崇高な思想、
高度に発達した学問があり、現代でも、学術研究やイデオロギ
ー、素晴らしい芸術やスポーツなどがあります。人間は時間と空間
を超えて、いつでもそのような人間の価値判断から良いと思
える存在に、救いと究極的価値を求めてしまう場合があるのです。
それらを究極的な目標と定めて日々努力することは、素晴らしい
ことであり、世界の様々な進歩と発展に不可欠であることは確
かです。そして、その価値観の中で生きる人々にとっては、生

きている充実感を与えます。しかし、価値観が異なる対象と相対した場合、争いを生む場合があります。また、価値観の違いは、対話すら許されない場合もあります。そして、そのような価値観の違いは、この世界で起きている争いの原因の一つであることは確かでしょう。そして、その原因の中には、特定の価値観によって主張される「平和」という概念も含まれると思います。また、宗教が教える「救い」も、排他的に遂行されるのであれば同じでしょう。小さな例として、わたしはイエス様のイエスというお名前の意味を「主は救いである」と訳しましたが、「主が救いである」でなければいけない、「主は救いである」は絶対に受け入れられないといわれると、たった一文字の違いですが、大変に困ってしまいます。また、主なる神様という存在も、イエス様という存在も名前も、一つの価値観に過ぎないと言われればその通りです。しかし、わたしたちは、そのことを自覚しつつ、イエス様の名前を呼ぶことを通して、『聖書』に基づき信仰を持ち、教会に集められ、価値観の違いを超えた道を見出す努力ができるのだと思います。

改めてただ「主は救いである」、そのことを改めて自覚することは、あまりにも単純すぎていて、あるいはあまりにも漠然しすぎていて、自分の願望や目的がはっきりしている人にとっては、大きな関心事にはならないかもしれません。事実、十字架の死に至るイエス様のご生涯に描かれたのは、そのような人間のあり方でした。つまり、自分の願望と目的がはっきりしていた人間は、みんな、イエス様に対して失望したのです。イエス様の十字架とは、すべての人の人間中心の期待を裏切った結果ともいえるのです。しかし、だからこそ、その姿に、主なる神様の大切な事柄が示されました。大切な事柄、それは一言でいえば、主なる神様の愛です。

イエス様のイエスという言葉を知覚するとき、わたしたちは、「主は救いである」という意味を心に刻みます。そして、わたしたちは、自分たちが何を求め、何を頼りにしているかを明らかにします。言い換えれば、イエス様の十字架の姿を通じて、わたしたちは、自分たちが不完全な存在であり、その意味では人間はみんな平等であり、また補い合わなければ生きていけない存在であることを自覚するのです。そこから同時に、各自に与えられた、本当の目標に向けて、歩むことができると思うのです。

さて、そのような意味を持つ、イエスという名前ですが、そこから示される事柄は、『聖書』（旧約）において、主なる神様について書かれている事柄と異なるわけではありません。むしろ、『聖書』（旧約）が示し続けている事柄を、より明確にしています。本日の旧約日課は、「主はモーセに言われた。「前と同じ石の板を二枚切りなさい。わたしは、あなたが砕いた、前の板に書かれていた言葉を、その板に記そう。」（出エ 34：1）とある通り、モーセが主なる神様から与えられた十戒の板を割ってしまったので、もう一度それを与えられるという個所です。モーセが同じ石の板を用意した時、「主は雲のうちにあつて降り、モーセと共にそこに立ち、主の御名を宣言された。主は彼の前を通り過ぎて宣言された。」（出

エ 34 : 5-6) のです。「主の御名」という部分は、唱えてはならない主なる神様の名前があります。そして、「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す。しかし罰すべき者を罰せずにはおかず、父祖の罪を、子、孫に三代、四代までも問う者」(出エ 34 : 6-7) とあります。この箇所は、主なる神様が人間に対してどのように臨まれるか、対応されるかを語っています。しかし、イエス様の時代には、後半部分のみの解釈が有名になっていました。生まれつき苦しんでいる人、不条理な不幸にあっている人について、主なる神様がどう考えているかを、説明する根拠として用いられていたのです。しかし、この箇所が主張しているのは、そちらではなく、前半の部分です。すなわち、「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す」です。つまり、主なる神様とは、人間の罪を見過ごすことはありませんが、圧倒的な恵みの豊かさをもって愛そうとされる方です。それは、恵みと裁きの年数を比較によってわかります。ひと世代は、聖書的には40年と考えます。罪を問うのは、3~4代、つまり120年~160年、しかし、慈しみを守るのは、幾千代です。千倍です。

『聖書』(旧約)は、主なる神様を特別ととらえ、また決して忘れることのないように、あえて主なる神様の名前を唱えないようにと教えています。それは教会においても同じです。しかし、教会に集められるわたしたちは、「イエス(主は救いである)」という名前を堂々と唱えることができます。そして、「イエス(主は救いである)」様がわたしたちに示して下さる救いは、千倍をさらに超えて、永遠(の命)です。わたしたちを愛し救う主なる神様は、そのような方なのです。

正月早々、説教原稿としていろいろなことを書いてしまいましたが、一年の最初の日、この一年の目標を掲げる方も多いと思います。また、一年の指針となるような標語あるいは聖句を決める教会もあります。わたしたちの教会ではそのような習慣はありませんが、すべての教会に共通することとして、新しい年は、常に「主は救いである」という自覚から始まる、そのことは小さいことではありますが、大きな意味があります。本日の使徒書は、パウロによる「ローマの信徒へ手紙」の冒頭の部分ですが、そこには「わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。」(ローマ 1 : 1-7) とあります。わたしたちの表現では、神様のことを考え、世界に恵と平和をのぞむとき、このような表現になります。これも特定の価値観による表現です。しかし、そこにイエス様の「イエス」という名前がある限り、すべての人へ恵と平和があることを望んでいる、そのことを、この一年も忘れないように歩みたいと思います。今年も、イエス様の名前にある意味を、少しでも具体化できるように、わたしたちの東京聖三一教会を通して、ご一緒に歩んでいきたいと思ひます。